会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

コロナ禍での家族増員

札幌市医師会
JR札幌病院
鶴間（つるま）　哲弘（てつひろ）

コロナ禍の生活が２年を過ぎました。全国の感染者数は減少してきていますが、北海道はむしろ増加傾向にあります。当院でも、家族内感染や家族内での濃厚接触により自宅療養・待機となっている職員が減らず業務に支障をきたしつつあります。

私自身、このコロナ禍の生活となり、飲み会などがなくなり単調な毎日が続く中、一番の変化は新しい家族である犬を飼ったことです。買い物帰りにショッピングセンターに併設されているペットショップを覗いてみると、瞬時にして目が合ってしまいました。『家連れてって！』と語りかけてきたのは、生後２ヵ月のレッドのトイ・プードル、雄。抱き上げると、ちょっと出っ歯で人懐っこくブンブン尻尾を振りながら顔を近づけてきました。店員さんに聞くと、昨日、ペットショップに来たばかり。コロナ禍での巣ごもり生活でペットの需要も高まり値段も上昇。これは運命だ！と思い、値段も気にせず即決カードで支払いました。家では、まだ赤ちゃんなのでグー、グー寝ていることが多く、『グー』という名前にしました。すぐに家族にも慣れたのですが、なかなか“おしっこ”と“うんち”を覚えてくれませんでした。YouTubeを見ながらしつけ方法を勉強しましたが、グーは自由な犬で、気が付けば、真っ白なラグの上で気持ちよさそうにジャーとおしっこをしてしまったり、フローリングの上でうんちをしたり・・・。真っ白なラグも徐々に黄ばんだ斑点模様のラグに変貌していきました。これはまずいと思い、犬のしつけの学校に通わせました。グーは楽しそうでしたが、あまり効果もなく１クールで終了にしました。ラグをクッションシートに敷き替えすっかり犬用の家に変わっていきました。ひたすら根気強く“おしっこ”と“うんち”を教え込みました。失敗しても決して怒らず、成功した時は大げさに褒めまくる。これが大切らしいです。これって、今どきの若者に対する接し方と同じでは・・・。不思議なもので、いつの間にか、“おしっこ”と“うんち”はケージの中だけでできるようになり、今では家の中で放し飼い状態が可能になりました。家に来てから約１年４ヵ月を経過し、グーは昼間誰も家にいない時はひたすらグーグー寝続け、家に家族が帰ってくると大好きなオモチャを咥えながら近づいてきます。オモチャを投げてあげると喜んで取りに行き、『また、投げて』と言って近づいてきます。グーはとても楽しそうですが、これを何回も何回も求めてきます。時にこちらが疲れてしまいます。尻尾の動きを見るとグーの気持ちがわかります。楽しい時は尻尾をグルグル回し、気分が落ちているときは尻尾も垂れ下がります。犬も人間同様、気分の浮き沈みがあり、それを見ているのも楽しいです。家に来たときは手の上に乗るくらいの小ささだったのですが、今では4.3kg、じわじわ大きくなって両親の体重を早くも追い越してしまいました。早いもので１歳６ヵ月、人間年齢に直すと20歳くらいでしょうか？　最近は、家の中だけでは体力を持て余しているようなので、外へ散歩に行くようになりました。家の中ではソファーの上にいるのが好きなようで、天気の良い日は窓から外の景色を眺めています。

そろそろ、コロナ禍の単調な毎日から、いろいろな行事を行う以前の生活に戻りたいものです。家で犬に癒やされるのもいいですが、大人数での飲み会や海外旅行など、いつになったらできるのでしょうか？まだまだ先は見えませんが、この単調な日常で、ついついペットショップに立ち寄ってもう一匹、家族を増やしてしまわないように注意が必要と思っています。